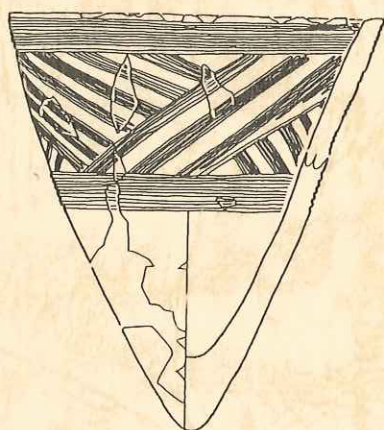


盛岡の縄文時代草創期～ 早期の土器文化

【資料集】



岩手県 盛岡市遺跡の学び館 2009.11

ごあいさつ

今から約1万5千年前、氷河期も終わりに近づき地球規模で温暖化が始まった頃、日本列島では人々の定住生活が始まり、狩猟や植物を加工する技術が発達し、やがて「土器」も作られるようになりました。その土器の出現をもって日本では縄文時代の始まりとし、その後弥生時代になるまでの約1万年間にわたって続きました。

盛岡周辺には土器出現期の縄文時代草創期から早期の遺物を出土する遺跡が多く、丸底や尖底を基調とした器形、そして数々の施文具を多用した文様など、造形的にもバリエーションに富んだ土器が数多く発見されています。

本展示では草創期の爪形文土器、早期の押型文・沈線文土器を出土した大新町遺跡を始め、北上川やその支流の遺跡から出土した盛岡地域最古の土器文化の様相について紹介いたします。

この企画展を開催するにあたり、大新町遺跡の調査に携わってこられた武田良夫氏並びに調査に対しご理解ご支援を賜った地権者各位・町内会の皆様に改めて御礼を申し上げますとともに、開催にご協力いただいた関係機関各位に深く感謝申し上げます。

2009年(平成21)11月

盛岡市遺跡の学び館

目次

押型文土器から、沈線文土器そして貝殻文土器へ 盛岡市出土の資料を主として 武田 良夫	9
岩手山降下火山灰と縄文土器 滝沢村出土の縄文土器と分火山灰の関係 井上 雅孝	31
《資料解説》 滝沢村内遺跡出土の無文土器群	47
《資料》 滝沢村内遺跡出土無文土器群	52
盛岡における縄文時代草創期・早期の土器 大新町遺跡出土土器を中心とした盛岡の土器 神原雄一郎	71

盛岡における縄文時代草創期・早期の土器

大新町遺跡出土土器を中心とした盛岡の土器

盛岡市遺跡の学び館 神原 雄一郎

I はじめに

岩手県盛岡市は、東の北上山地と西の奥羽山脈の間に流れる北上川によって作りだされた北上平野の北端に位置する。

北上川は、岩手町と一戸町の境界付近にある西岳(1,018m)東麓を水源地に宮城県石巻湾に至る流路延長247kmの大河川で、盛岡はその北上川上流域にあたり、市内で奥羽山脈より東流する雫石川、北上山地より西流する中津川・築川と合流して水量を増し盛岡以南に広い平野部を形成させる。

さて、市街地を東西に分断する北上川であるがその様相は盛岡市北部と南部で景観を異にする。

雫石川合流点以北、特に安倍館町以北では西岸の滝沢台地と東岸の四十四田丘陵に挟まれ、峡谷の様相を呈しているが、雫石川合流点以南は田園風景が広がる平野部となる。縄文時代の遺跡の多くはこの平野部を見下ろす段丘・台地縁辺・丘陵に集中する傾向があり、特に雫石川が南縁に流れる洪積台地縁

辺(滝沢台地)や北上山地の縁辺に発達する丘陵地には数多くの縄文時代草創期～早期遺跡が集中する。

現在、盛岡市では旧石器時代から江戸時代までの遺跡が785箇所確認されており、縄文時代の遺跡はその内460箇所になる。その中で縄文時代草創期の遺物が出土した遺跡は2遺跡、そして早期の遺物が出土した遺跡は85遺跡と単純にみると縄文時代遺跡10遺跡の内、約2遺跡で早期の遺物が確認されていることになる。草創期以前の遺跡は少ないが、早期になると急激に遺跡が増加する要因は何なのか。明確な理由はまだ不明であるが事実とするのは早期の段階で多彩な文様を施す土器が数多く製作されていることである。

本稿ではこれまでに盛岡市で発見された縄文時代草創期・早期の土器を集成し、盛岡市における土器の使用がはじまる頃の器形や文様を中心に縄文時代草創期から早期の土器文化の流れを概観したい。



第1図 盛岡周辺の主な縄文時代草創期・早期遺跡分布図

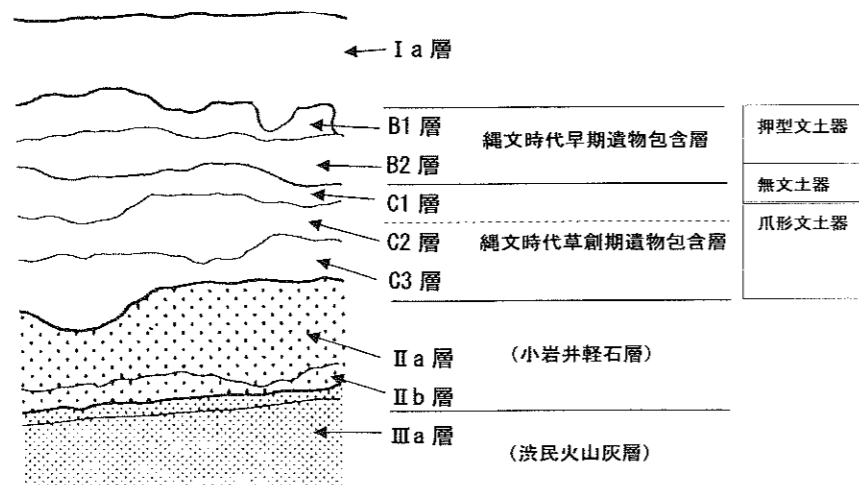
II 盛岡の縄文時代草創期

爪形文土器

盛岡市において縄文時代草創期の遺跡が確認されたのは、昭和 60 年度に実施された大新町遺跡第 19 次発掘調査である。

大新町遺跡から出土したのは縄文時代草創期を代表する土器のひとつである「爪形文土器」であった。爪形文土器を包含していた火山灰層は約 12,000 年前に降下した小岩井軽石層の上部に堆積する褐色火山灰層で層位的にも問題の無い草創期の土器群といえよう。

大新町遺跡の爪形文土器を検討した千田和文は、出土した「ハの字形」爪形文土器に注目し、前段階の土器群である隆起線文系土器に併用施文されるハの字形爪形文と後続段階とされていた多縄文系土器群と併用施文されるハの字形爪形文の例をあげ、大新町遺跡では前後段階の文様との併用施文が認められないことから隆起線文系土器群→「爪形文土器群」→多縄文系土器群とする爪形文単独期の所産とする位置付けをした。なお、当時の東北地方における爪形文土器の出土例は、青森県鴨平(2)遺跡、山形県日向洞穴・一ノ沢岩陰・尼子岩陰・火箱岩洞穴など数箇所を過ぎず、関東地方においても埼玉県宮林遺跡・西谷遺跡、東京都川島谷遺跡など少数例なうえに土器破片が数点出土の遺跡が大半であるため、遺跡間の比較検討、爪形文土器前後の土器文化との編年上の問題が現在でも残されている。



第 2 図 縄文時代草創期から早期前葉にかけての層位関係図

昭和 61 年には同じく大新町遺跡で全体形が復元可能な個体破片が出土する。復元された爪形文土器は乳頭状の尖底部を持つボール状の深鉢で、器面には米粒状の爪形文を横位多段に施すものであった(第 3 図)。また、安倍館遺跡第 7 次発掘調査、大館町遺跡第 54 次発掘調査でも微量の爪形文土器片が出土するなど市内でも僅かながら類例が増加してきている。

1 大新町遺跡の爪形文土器

大新町遺跡第 19 次発掘調査では 2,077 片もの爪形文土器片が発見されている他、第 21 次発掘調査では 1 個体分の土器片が出土し全体の器形が復元された。その他にも小石川遺跡で旧石器時代終末期の尖頭器に伴出する可能性がある土器片が武田良夫氏によって採集されている。本編では大新町遺跡出土の爪形文土器について概要を述べたい。

爪形文土器(第 3 図～第 13 図 30)

出土状況 大新町遺跡では、秋田駒ヶ岳を噴出起源とする小岩井軽石(KP)(11,520～16,300)の上面に形成される褐色火山灰層中に爪形文土器を中心とする縄文時代草創期の遺物が含まれていた。褐色火山灰層はさらに 3 層に細分されており(C1～C3 層)、C1・C2 層を中心に全層から遺物が出土している。

ここで、簡単ながら大新町遺跡で確認されている火山灰について述べておきたい。

盛岡市周辺を含め、北上川流域には西岩手火山、東岩手火山、秋田駒ヶ岳火山起源の更新世～完新世火山灰が分布しており、大新町遺跡が立地する滝沢台地は現在の岩手山が形成される以前の噴出流下したスコリア質火砕流堆積物(大石渡火山角礫岩)を原形に、その上部に後期更新世～完新世の火山灰が覆っている。

滝沢台地に堆積する火山灰層は下部より、外山火山灰、渋民火山灰、分火山灰が堆積しており、分火山灰に包括され縄文時代草創期～早期に関連する火山灰は下層より、八戸火砕流堆積物(11,400～13,960)、小岩井軽石(11,520～16,300)、柳沢軽石(11,650～14,240)、堀切軽石(8,860～10,640)がある(()内は火山灰の測定年代値であるが、測定に用いた資料により年代幅がある)。

草創期の遺物が小岩井軽石の上面に形成される褐色火山灰に含まれていることは前述したが、大新町遺跡第 67 次発掘調査で検出された RA 6 5 1 3 堅穴住居跡内には堀切火山灰が堆積しており、火山灰の上層に貝殻文土器群、押型文土器は火山灰に覆われる。爪形文土器は押型文土器より下層から出土することから、小岩井軽石の年代よりも新しく、押型文土器より明確に古い土器であることがわかる。

爪形文土器の特徴

器形 口径が大きく、口縁部付近は直立気味にやや外反するものが多い。全体形は緩やかなカーブを描くボール形を呈し、底部は丸底に近い乳頭状の尖底となる。第 3 図の土器が代表的な個体で、推定器高

16.7 cm・推定口径 19.3 cm をはかり、他の土器についても第 3 図の土器に近い器形であると考えられる。

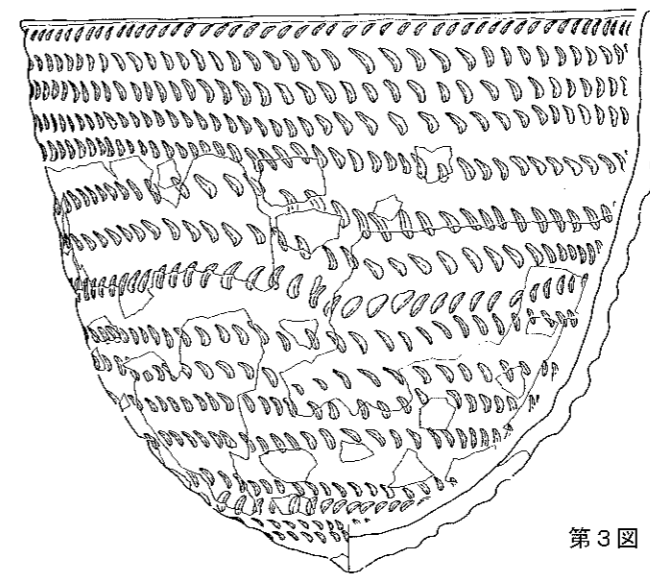
胎土 胎土は緻密で、雲母・若干の石英粒を含むものが多い。色調は橙色、にぶい赤褐色を呈し、焼成は堅く締まる。

製作 成形で特徴的なのは、粘土の接合部で、粘土接合面の上部は凹状、下部は凸状になる。さらに接合部に粘土を貼付して器面を成形するものもある。土器内面は横位方向のナデ調整を施す。

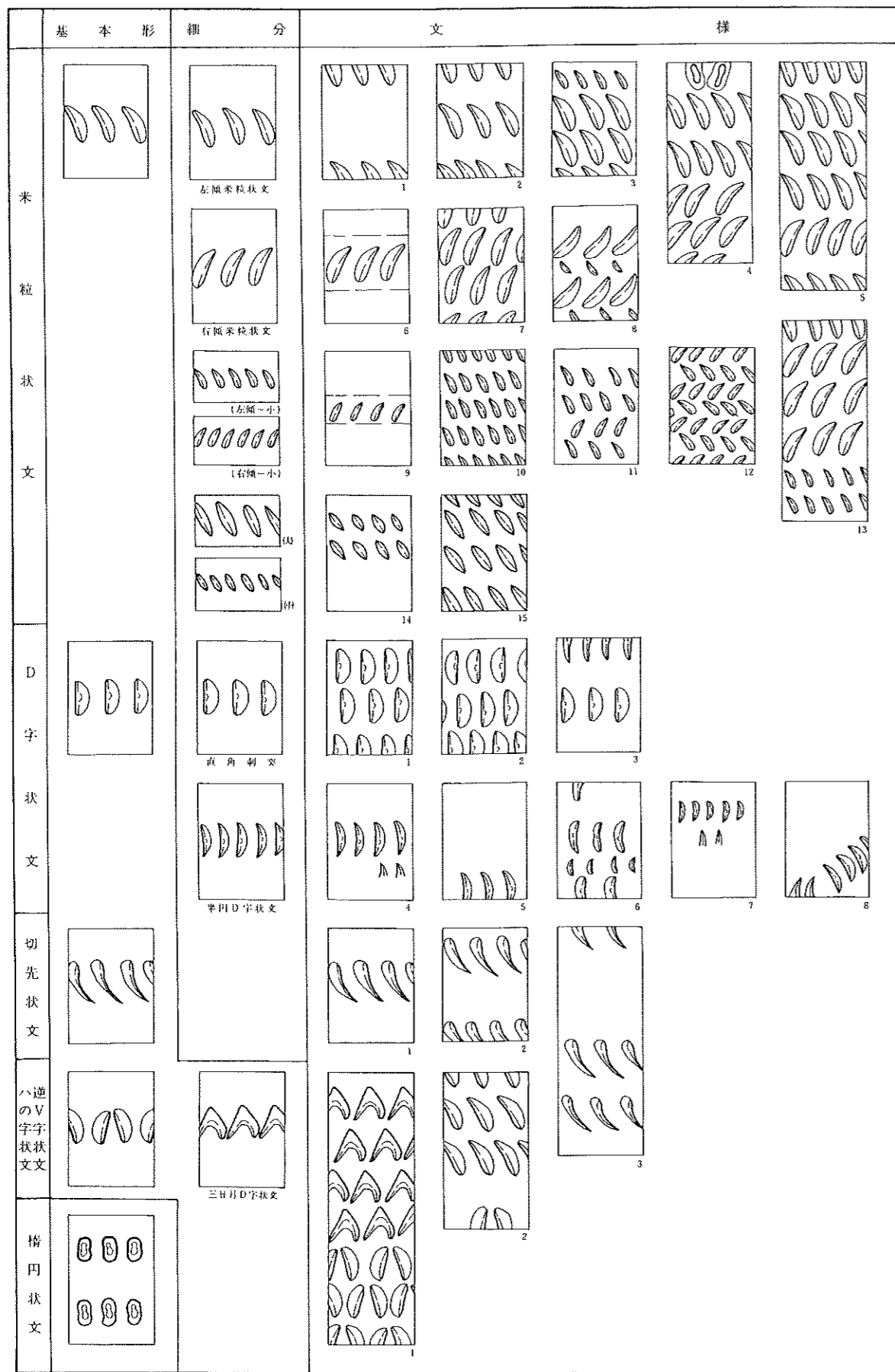
文様 爪形文は右傾・左傾・縦位の方向をとるものが多い。基本的には横位に爪形文を連続して施文し、多段の構成で器面に施す土器が多い。

爪形文は文様を施す手法により米粒状・D 字状・切先状・ハの字状・逆 V 字状・楕円状の文様に大別され、これらの文様が相互に施文されることにより器面が装飾される(第 4 図)。

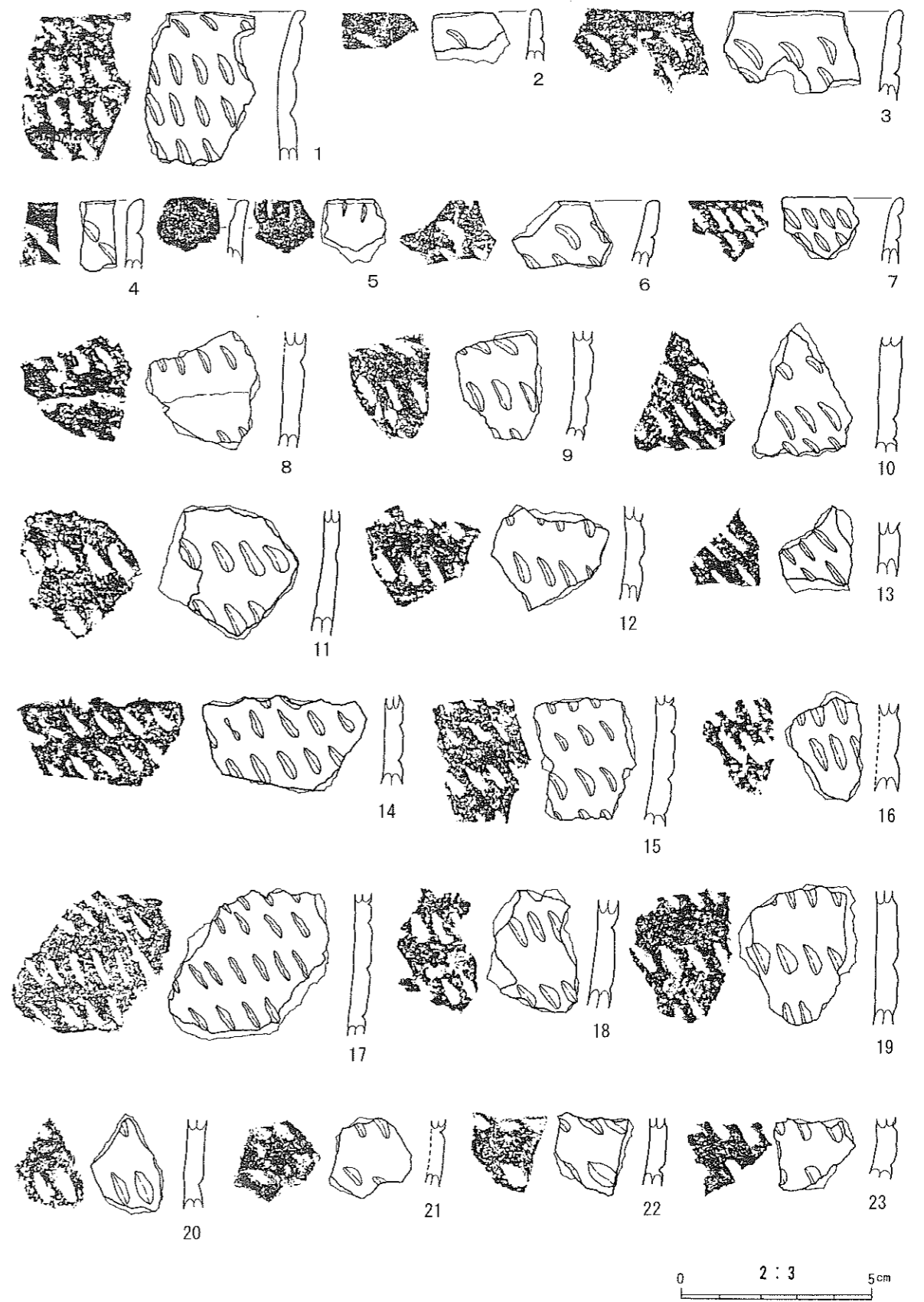
草創期の土器は全国的な変遷過程として、隆起線文土器→爪形文土器→多縄文土器の流れが考えられている。県内において爪形文土器以前の土器は発見されていないが、青森県櫛引遺跡では爪形文土器群に後続するものと考えられる室谷下層式に類似する多縄文系の土器が多量に出土しており、そのなかには粘土の接合部分に粘土帯を貼付、貼付した粘土帯上に爪形状の刺突を横位に施すものがある。同様の手法は大新町遺跡の爪形文土器群でも確認され、両者の製作技法上で極めて近い関係にあることが思われる。



第 3 図 大新町遺跡出土土器 1 : 3



第4図 大新町遺跡出土爪形文模式図



第5図 大新町遺跡出土土器(草創期)

Ⅲ 盛岡における縄文時代早期の研究

盛岡市で縄文時代早期の研究が本格的に始まるのは、昭和30年に岩手大学草間俊一教授が中心となって発掘調査が実施された日戸遺跡からである。日戸遺跡は昭和30・31年の2箇年にわたり発掘調査が実施され、縄文時代早期から後期にかけての遺物が出土した。当時、岩手県内では正式な調査による縄文時代早期以前の遺物出土例が皆無に等しく、研究が進展していた青森県八戸市近郊から発見されていた貝殻文土器群と同類の土器が出土する遺跡として注目された（青森県では慶應義塾大学江坂輝弥氏によって白浜遺跡、小船渡遺跡、物見台遺跡、吹切沢遺跡、ムシリ遺跡など早期遺跡が調査され八戸市周辺を中心とした早期土器群の様相が次第に明らかにされていた）。日戸遺跡発掘調査報告書によると日戸遺跡出土土器は上層土器（後期）、中層土器（中期）、下層土器（早期）に大別しており、下層土器について「白浜式に近いものもあるが、多くは下松苗場の型式に類似する」としながらも「二三の土器型式を含む」と一括された貝殻文土器のなかに数型式の土器の存在を示唆していた。現在では、日戸遺跡出土の早期土器は白浜式・寺の沢式・物見台式・ムシリI式土器に分けることができ、特に寺の沢式土器の出土量が最も多かったようである。

昭和40年代になると、武田良夫氏による調査・研究により盛岡近郊でも数多くの縄文時代早期の遺跡が確認されるようになる。また、武田氏は岩手大学の草間俊一教授、盛岡市公民館の吉田義昭氏と協同で小規模ながら、昭和42年4月に盛岡市一本松熊の沢遺跡の発掘調査を実施する。調査では、盛岡で初めての出土となる日計式押型文土器や白浜式・寺の沢式など数型式にわたる早期土器が確認され、盛岡の縄文時代を研究する上で重要な成果をもたらした。なお、一本松熊の沢遺跡発掘調査に先立つ昭和38年に住田町蛇王洞洞穴遺跡の発掘調査が東北大学芹沢長介・林謙作両氏によって実施され、東北地方で初めて層位的に早期土器が発見された。その結果は、古い順に①押型文土器群（日計式）→②捺糸・沈線文土器群（蛇王洞Ⅱ式）→③貝殻・沈線文土器群

（明神裏Ⅲ式・物見台式）→④貝殻・沈線文土器群（大寺I式・吹切沢式）→⑤隆線文・条痕文土器群（槻木I式）→⑥縄文・条痕文土器群（船入島下層式）の順で、層位的出土例が皆無に等しかった東北地方では早期土器群の流れを知る上で重要な成果が報告された。なお、大きな時期区分としては現在、①の時期を早期前葉（押型文土器群）、②～④を早期中葉（②沈線文土器群、③・④貝殻・沈線文土器群）、⑤の時期を早期後葉（条痕文土器群）、⑥の時期を早期末葉（縄文土器群）としている。

昭和42年秋、武田氏は小屋塚遺跡（現 大新町遺跡）でV字内に横位の平行線を充填する日計式と異なる押型文土器を採集する。昭和44年、考古学ジャーナル第36号「盛岡市上堤頭・小屋塚遺跡の押型文土器」のなかで、「菱形文の衰退と沈線による平行横線から押型文による平行線状文への発展」という押型文土器の変遷を示し、日計式に後続する土器型式として「小屋塚式」を提唱した（後に「大新式」と変更）。さらに武田氏は昭和57年赤い本創刊号「岩手県における押型文土器の様相」のなかで、「風林遺跡に見られるように、斜行沈線文が平行線状押型文の上にかかれ……この文様の構成は三戸式など沈線貝殻文土器にそのまま踏襲される。」とし、大新式が押型文土器から沈線貝殻文土器に移り変わる過渡期の土器とした。

その後、大新町遺跡は盛岡市教育委員会によって昭和57年度以降現在までに31次にわたる発掘調査が実施され、武田氏の見解を裏付ける資料が多数出土している。

平成5年度に前九年遺跡の発掘調査が実施され、市内で初めての早期初頭の無文土器群が発見された。小破片では以前より大新町遺跡、大館町遺跡、館坂遺跡、安倍館遺跡、山王山遺跡から出土していたが、他時期の土器と混在して出土していたため、編年的位置付けは避けられていた土器であったが、前九年遺跡の調査例から同様の土器群であることが確認された。

平成6年度に実施された庄ヶ畑A遺跡第1次発掘調査では日計式押型文土器を伴う竪穴住居跡が5棟検出され、盛岡市では最古の集落遺跡として注目

された。

平成7年度に調査が実施された新茶屋遺跡では、押型文・沈線文土器より新しい時期の貝殻文土器（寺の沢式、明神裏Ⅲ式類似土器）が多量に出土した他、貝殻文土器群に後続する条痕文土器（ムシリI式・槻木I式）が出土するなど早期中葉から後葉にかけての土器変遷を知る上で重要な成果が得られた。

平成9年度に大新町遺跡第61・62次発掘調査が実施され、それまでに知られていた押型文・沈線文土器に後続すると考えられる沈線による幾何学文と貝殻文を併用した土器が出土し、沈線文土器群（大新町b式）から貝殻文土器群へ変遷する過程の中の土器群として注目される。

平成14年に調査が実施された西黒石野遺跡では、沈線・捺糸文を主文様とした蛇王洞Ⅱ式類似土器が多量に出土した。それまで、蛇王洞洞穴遺跡以外では蛇王洞Ⅱ式土器が断片的にしか出土していなかったことから西黒石野遺跡例は蛇王洞Ⅱ式土器を理解するうえで重要な追加例になる。

また、西黒石野遺跡では関東地方に分布する三戸式土器、東北地方北部に分布する白浜式土器に近似する土器も出土しており、地方における土器の併行関係を知ることが出来る。

平成19年度に調査された薬師社脇遺跡では蛇王洞Ⅱ式に後続する土器群と思われる土器が竪穴住居内から一括して出土しており、沈線文土器以後の詳細が明らかにされた。

以上が盛岡市及び関連遺跡の調査・研究の概要である。上記した通り盛岡市では数多くの縄文時代早期遺跡の調査が実施され、土器編年を考える上で基準となる資料も多い。蓄積された資料が公開されたことにより、更なる土器研究が進展することが期待される。

Ⅳ 早期土器の概要

現在、盛岡周辺では大きく①無文土器群（前九年遺跡・館坂遺跡・山王山遺跡・安倍館遺跡・大館町遺跡・大新町遺跡）→②押型文土器群1（大館町遺跡他）→③押型文土器群2（大新町遺跡・風林遺跡・室小路遺跡）→④沈線文土器群（大新町

遺跡・大館町遺跡）→⑤沈線文土器群2（大館町遺跡・西黒石野遺跡・屠牛場遺跡）→⑥貝殻沈線文土器群1（薬師社脇遺跡・日戸遺跡・屠牛場遺跡・新茶屋遺跡・一本松熊の沢遺跡）→⑦貝殻沈線文土器群2（薬師社脇遺跡）→⑧貝殻沈線文土器群3（下猿田I遺跡）→⑨条痕文土器群（宿田遺跡・大館町遺跡・猪去館遺跡）→⑩縄文土器群（宿田遺跡・大館町遺跡）と変遷することが考えられている。押型文土器群については日計式と大新町a式に大別されることは明確で、日計式についてもさらに3細分される可能性がある。

上記の土器変遷は蛇王洞洞穴遺跡の層位的出土例など他遺跡の調査結果や大新町遺跡で確認された層位的出土例を基本に、文様の変遷過程を加味して考えたものである。

① 無文土器群

岩手県で無文土器について初めて注目したのは、当時岩手県立岩泉高等学校教諭の菊池強一氏であった。菊池氏は1965年頃に岩泉町瓢箪穴洞穴を訪れ、洞内に散乱していた遺物が県内でも出土を見ない遺物が多いことに注目し、翌1966年菊池氏は瓢箪穴洞穴を岩泉町教育委員会との共催で発掘調査を行い、当初の目的であった旧石器時代の遺物は確認されなかったものの、縄文時代早期編年に関する重要な成果を得る。瓢箪穴洞穴では第I層からIX層まで大別され、縄文時代早期の遺物は第III層から第VI層で確認された。第III層はa・b層の2層に細別され、IIIb層より早期中葉の貝殻沈線文土器（白浜式）が出土、第IV層は無遺物層で第V層より無文土器、第VI層より無文土器・押型文土器・縄文土器が出土したことを報告した。そして、第VI層出土土器を「瓢箪穴I式」、第V層出土土器を「瓢箪穴II式」とした。1968年、菊池氏は同町竜泉洞新洞遺跡の発掘調査を行い、第II層とした地層より多量の薄手平底の無文土器と共伴する石器・骨角器・獣骨等を得た。菊池氏は竜泉洞新洞遺跡出土の無文土器を「竜泉洞新洞式」と名付け、押型文土器以前の土器として早期初頭に位置付けた。

竜泉洞新洞式に類似する無文土器は竜泉洞新洞

の調査後、暫く類例を見ない状況であったが、近年盛岡市内でも前九年遺跡（第16図1～20）、館坂遺跡（第16図21～第19図86）、山王山遺跡（第20図1～第21図57）、大新町遺跡（第22図1～38）よりまとまった土器が出土している。

盛岡市に隣接する滝沢村では室小路15遺跡、大釜館遺跡、法誓寺遺跡、仏沢Ⅲ遺跡の諸遺跡から多量の無文土器群が出土しており、爪形状刺突文などを施す土器も含めて井上雅孝氏は「室小路式」と仮称して青森県から岩手県にかけて一定の分布域を持つ土器文化と捉えている。

前九年遺跡では、大新町遺跡で爪形文土器が出土した褐色火山灰層の上面（C1層上面）から無文土器が出土している。爪形文土器は褐色火山灰層の全体から出土することから無文土器は爪形文土器よりも新しい土器群であることが考えられ、さらに上層の暗褐色土層より早期前葉の押型文土器が出土することから押型文土器群より古い土器群であることは間違いないようである。

無文土器群には若干ではあるが爪形状刺突文、円形刺突文、沈線文、縄文が施される土器が伴う。前九年遺跡、館坂遺跡、山王山遺跡においても爪形状刺突文を施す土器が出土している。山王山遺跡では縦位の平行沈線と原体圧痕を施す土器（第20図11）もあり無文土器を主体としながら、有文の土器が製作されていたことが明らかである。無文土器群前後の土器様相は爪形文土器群同様に不明な点が多く、特に早期前葉に位置付けられる日計式押型文土器への変遷過程は漠然としたものである。その為、僅かな有文土器は無文土器を知る上で重要な鍵となる。

② 押型文土器群1

押型文土器とは長さ5cm前後、径1cm前後の円柱状の材に文様を彫り（原体または施文具）、完成した原体を土器の器面に回転押捺させ、原体の陰刻部を器面に表出させる文様施文方法である。縄文時代早期に全国的に流行した施文方法であるが、東北地方を中心に流布した押型文を「日計式」と呼称している。日計式とは八戸市日計遺跡出土土器を標式とし、分布範囲は北海道南部渡島半島から関東までと広く、

特に青森県から福島県にかけての太平洋側の地域から数多く発見されている。

盛岡市内では、大新町遺跡・大館町遺跡・庄ヶ畑A遺跡・一本松熊の沢遺跡・屠牛場遺跡・上米内遺跡・向館遺跡・田の沢遺跡・砂溜遺跡・下田八幡館遺跡・牡丹野遺跡などから出土しているが、多くは数点の出土であることが多く、比較的出土量が多いのは大館町遺跡・庄ヶ畑A遺跡の2遺跡である。

市内から発見された日計式押型文土器群は文様組成から2～3細分されることが予想される。大きくは平行線状押型文が伴わない土器群（大館町遺跡第59図1～48、庄ヶ畑A遺跡第63図1～21）と平行線状押型文が伴いV字状、菱形状の文様を重層させた原体を多用する土器群（大館町遺跡第60図49～65）の2群に大別される。後者の土器には、大新町a式に特徴的な、文様内に横位の平行線を充填させた原体を用いた土器が散見されることから大新町a式につながる土器群と見て良いであろう。

さて、近年日計式押型文土器群の中に特異な原体を用いた土器が含まれていることを知り、類例を求めていたところ、これらの土器には土器群と言いき土器組成があることが考えられるようになってきた。その土器群は大館町遺跡出土土器に含まれており（第59図1～48）、現段階としては日計式に包括させるが、将来的には時期区分上で分離される可能性がある。以下は現段階で知り得た諸特徴である。

器形・胎土 全体形を知る資料はないが、緩やかなカーブを描く砲弾状の尖底を呈するものと思われる。胎土には雲母と石英粒を多く含み、繊維は極めて微量か含まれない。器壁は薄く、口縁部から体部下半までは5mm前後、体部下半以下で1cm前後のものが多い。色調は明黄褐色、淡い黒褐色を呈し、焼成は硬く締まる。

文様 日計式同様にV字状文はあるが（第59図5～18・21～23・29～31）、縦位の平行線が表出される原体が用いられる（仮「縦位平行線状文」第59図19・20・24・25・27・28・32～41）。縦位平行線状文とした原体は長さ約5cm前後と日計式の押型文原体と大きな差はない。しかし、同じ条が表出されるまでが短く（短いもので1cm）、原体両端の凹凸が大き

く、条を観察すると幾筋もの縦方向の繊維痕が観察され、条についても均一な太さではないことから円柱状の材に文様を陰刻したものではないことが考えられた。近い文様が表出されるのは「ヨモギ」など植物の茎を回転させたもので、他の植物では試していないが植物の茎などを直接原体として利用している可能性がある。

押型文以外では、無文（第59図1～4）、縄文（第60図66～76）がある。胎土は前述した押型文土器に近似するものである。

以上が現在問題としている押型文土器群である。日計式押型文については出土量の少なさも手伝い、実態が不鮮明な土器群であるが今回の問題を機に日計式については再検討する必要がある。

③ 押型文土器群2

盛岡市大新町遺跡、滝沢村風林遺跡より押型文土器の終末を示す遺物が発見されている。押型文の文様はV字状文など日計式と共通する文様内に横位の平行線を充填するものを基本とし、さらに縦割区画された原体を用いるなど日計式に比べ原体が多様となる（第14図）。

これらの土器群に対し武田良夫氏は大新式という型式名を与え、後に岡本東三氏により大新町a式（押型文・沈線文）、後続する大新町b式（沈線文）に2細分されている。大新町a式は押型文と沈線文による文様を主体とする土器群で、同一器面に押型文と沈線文を施す土器や押型文の意匠を模した土器があるなど結びつきの強さを示す土器が多い。

大新町a式（押）（第24図1～第45図25）

器形 大館町遺跡・大新町遺跡出土の日計式土器の体部器壁が5mm前後であるのに対し、大新町a式では平均して9mmあり、厚いものでは13mmをはかるものもある。土器自体も大形土器が製作されるようになり、口径が40cmを越える可能性がある土器片もある。口唇部形状は丸頭・平頭・内削ぎの3種類が認められ、器形は緩いカーブを描き砲弾状を呈する。**胎土** 胎土には繊維・雲母が含まれるなど日計式との関連が窺われ、沈線文土器についても押型文土器と全く遜色のない胎土である。

文様帯（第15図） 大新町a式（押型文）は第24図11、第26図1のように全面に横線V字状文を施してから横位平行線状文や横位平行沈線で文様帯を区画するものが基本的である。文様帯はⅠ—口縁部、Ⅱ—体部、Ⅲ—体部下半～底部に分けられるが（第15図）、地文となる押型文の段ごとに横位平行沈線等を施すものもあるため一様ではない。

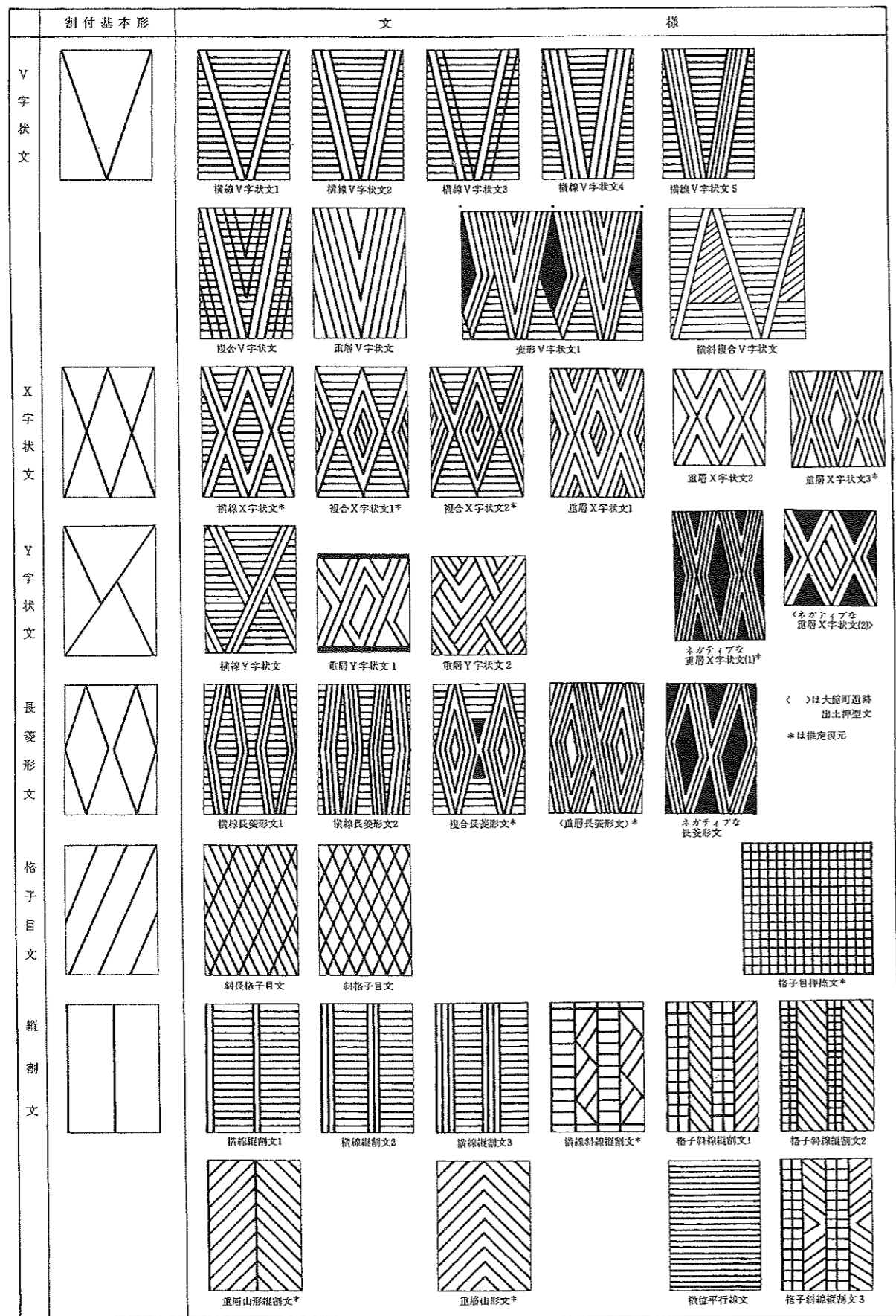
文様 大新町a式（押型文）で特筆されるのは、文様原体に多くのバリエーションをもつことである。割付の基本形はV字状文・y字状文・X字状文・菱形文・格子目文・縦割文・平行線状文の7種で、各基本形は更に細別される（第14図）。これらの文様の多くは日計式の基本形を踏襲し発展させたものと考えてよいであろう。しかし、格子斜線縦割文など正格子目を縦位帯状にした原体は大新町遺跡のみで見られ、その出自については単なる文様の組み合わせで作られたものではなく、沈線文土器の影響を受けて作られた原体であることも考えられる。

幾何学状沈線 大新町遺跡では横位平行沈線または押型文を施文したのち、その文様に沈線による幾何学文を描き、横線V字状文など押型文と同様の文様効果を表現した土器がある。第25図1～6、第26図6・7が該当する土器で、同様の土器は滝沢村風林遺跡（武田氏資料参照）、室小路遺跡からも出土していることから大新町遺跡のみの突発的な文様ではないようである。遺跡数が少ないため定かではないが、押型文に幾何学状沈線を加える手法は押型文文化から沈線文文化への過渡期の特徴として考えられよう。

大新町a式（沈）（第46図5～第50図23）

器形・胎土 押型文土器とほぼ同様であるが、内外面にミガキがみられるものもある。

文様帯（第15図） 沈線文土器では、文様帯が大きくⅠ—口縁部、Ⅱ—体部、Ⅲ—体部下半～底部、Ⅳ—底部に分割される傾向が強くなる。Ⅰ・Ⅲ帯は横位平行沈線による区画を意識した文様が施され、Ⅱ帯はⅠ・Ⅲ帯より広いキャンパスが確保され、沈線による幾何学文や斜格子目文が施される。Ⅳ帯は無文部となるものが多い。施文順は次の通りである。①横位平行沈線などによる横位区画→②区画間に設



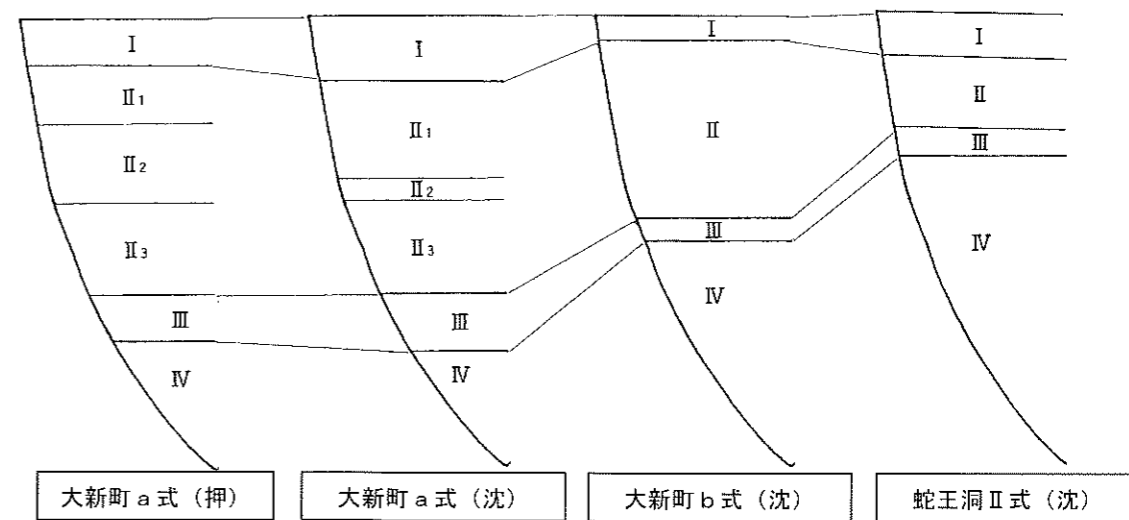
第14図 大新町遺跡押型文模式図

けられた幅広の文様帯に主要となる文様を施文。
文様 押型文の文様帯・文様を模したものと思われる土器(第46図5~13、第47図8~12・14)、押型文と沈線文を併用した土器(第25図1~6、第26図6・7、第37図1、第46図1~4)、文様帯が横位平行沈線で区切られる横位多段の文様構成を持つ土器(第46図6~15)、带状格子目文、平行沈線を数条1組とした带状幾何学文を施す土器(第47図1~7・13・14、第49図1~23)がある。
大新町a式(縄・捺)(第51図1~第54図22)
器形・胎土 器形・胎土については大新町a式の押型文・沈線文土器と大きな差はない。
文様 縄文施文(第51図1~第52図51)、捺糸文施文(第53図1~第54図22)の土器がある。日計式にも縄文施文の土器が伴うが、日計式の縄文は結節の無い羽状の縄文が横位多段に施されるものが多いことに対し(第23図14~44)、大新町a式に伴う縄文は横位・斜位など不規則であることが多い。また、口唇下に縦位の短沈線が施されるもの(第51図1・2・4・5)、格子目・幾何学状の沈線が縄文施文後に施される(第51図9~12、第52図8~51)など日計式の縄文施文土器より装飾性に富む。
 捺糸文施文の土器は日計式段階では見られない土

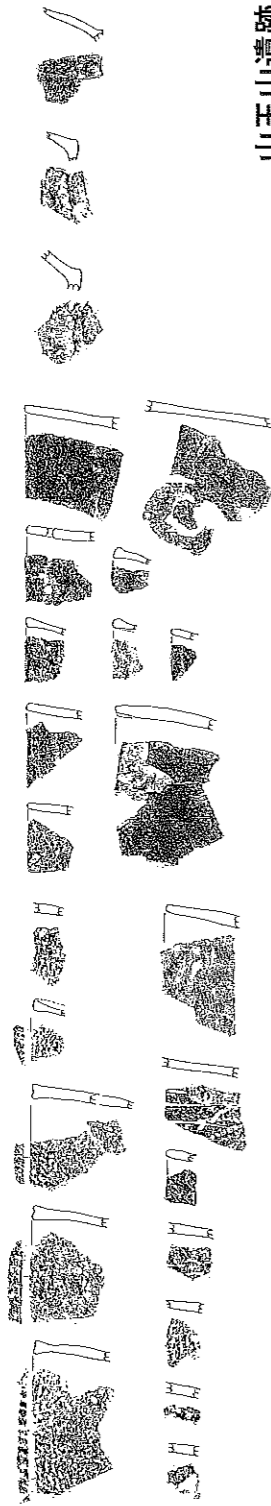

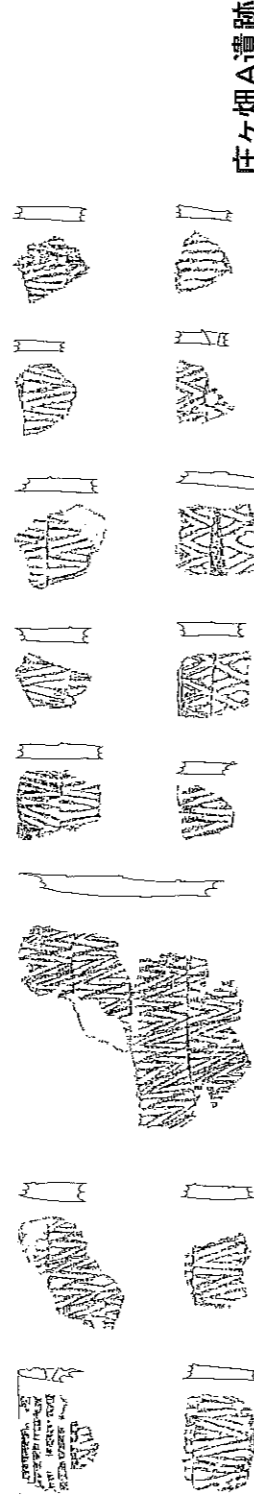

器で、大新町a式段階で現れる(第53図1~第54図22)。原体は1~2cmの単軸絡条体と考えられ、地文として横位に施文後、沈線(第53図1~9・14)または同じ原体を幾何学状に施す。また第54図1~22のように網目状の捺糸文を施す土器が存在するなど、大新町a式全体を概観すると日計式に比べ文様種類が多彩であることがわかる。

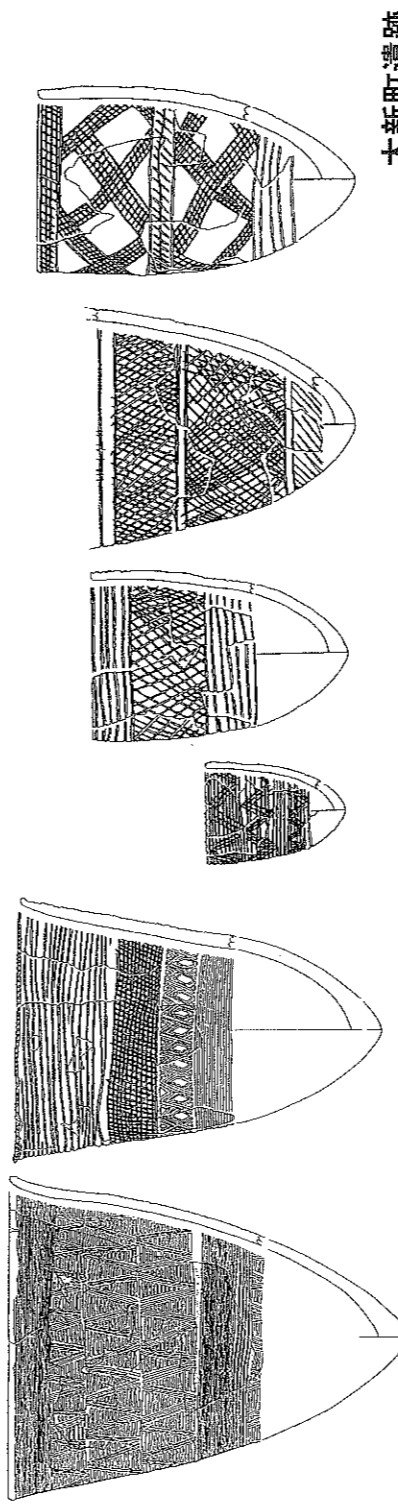
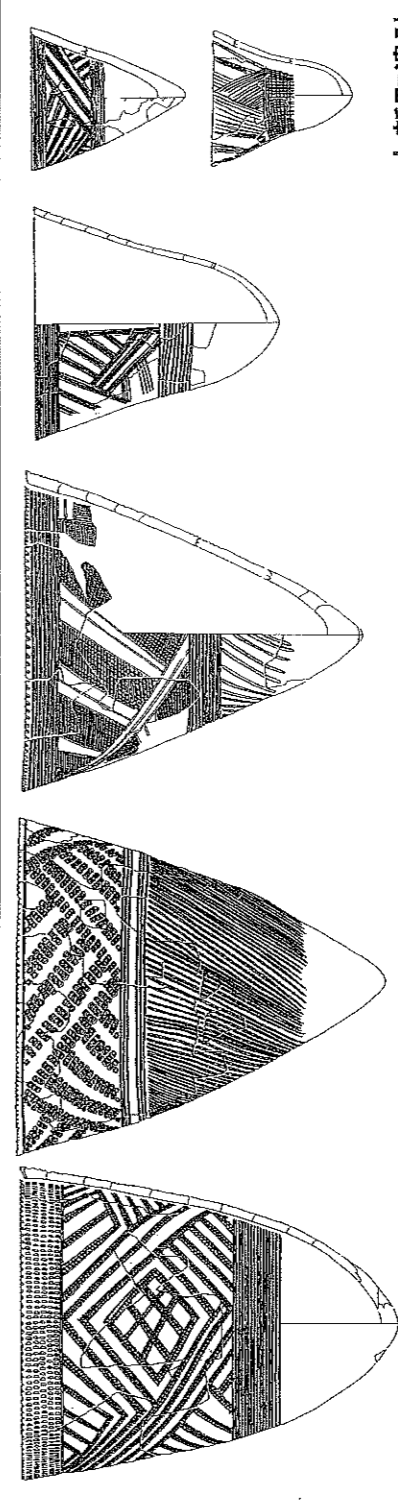
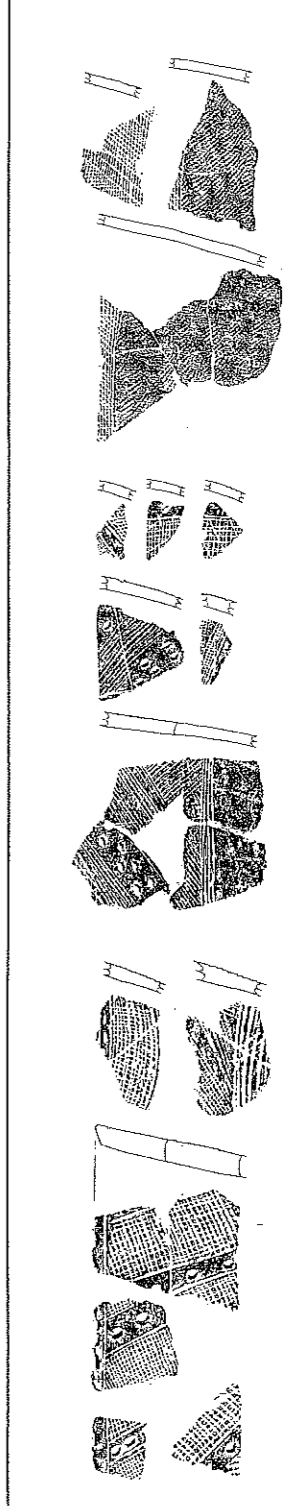
④ 沈線文土器群1
 大新町b式(第55図1~第58図18)

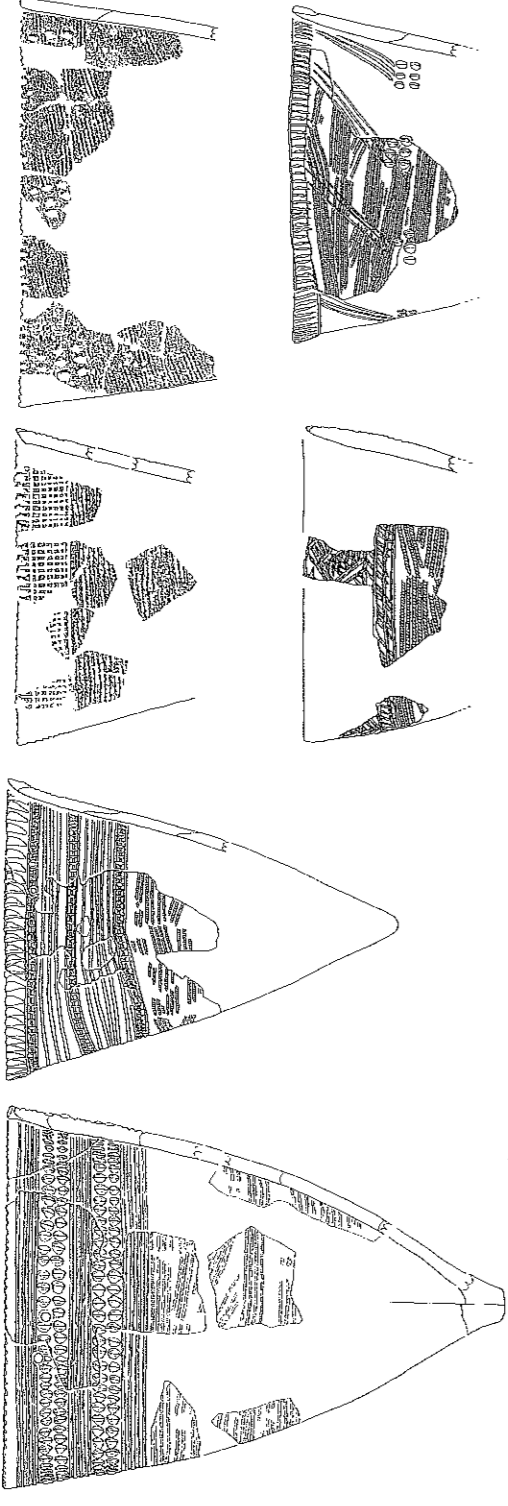
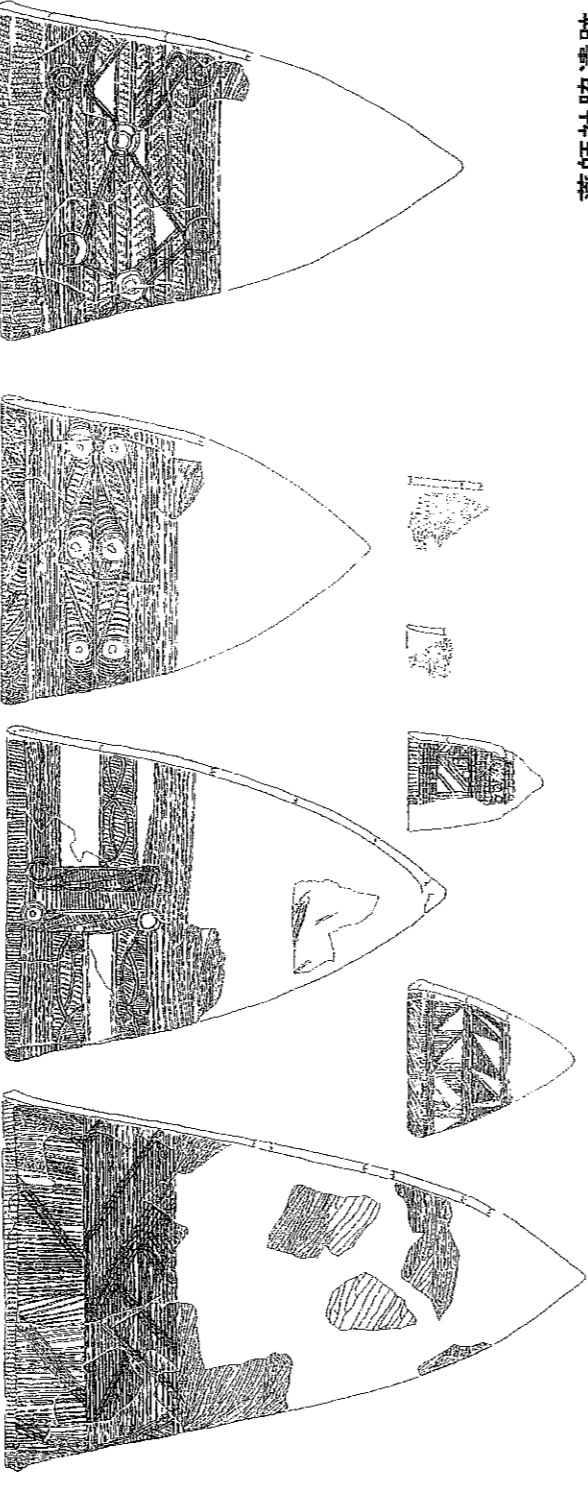
大新町遺跡出土の沈線文土器には繊維を含む土器群と繊維を含まない土器群があり、前者については押型文に伴い(大新町a式)、後者については大新町a式に後続する土器群であろうとされた。層位的に確認されたものではないが、資料の蓄積が進むにつれ下記の特徴が見出されるようになった。
器形 口唇部形状の多くが内削ぎとなり、器形は緩いカーブを描く砲弾状を呈するもの、直線的な円錐形を呈するものがあるが、多くは後者の器形である。
胎土 胎土には細かい砂粒(石英・角閃石・長石・磁鉄鉱?)が含まれ、雲母は含まない。繊維を含むものもあるが全体的には少数である。なお、大新町b式以後の早期中葉の土器では細かい黒色鉱物(磁

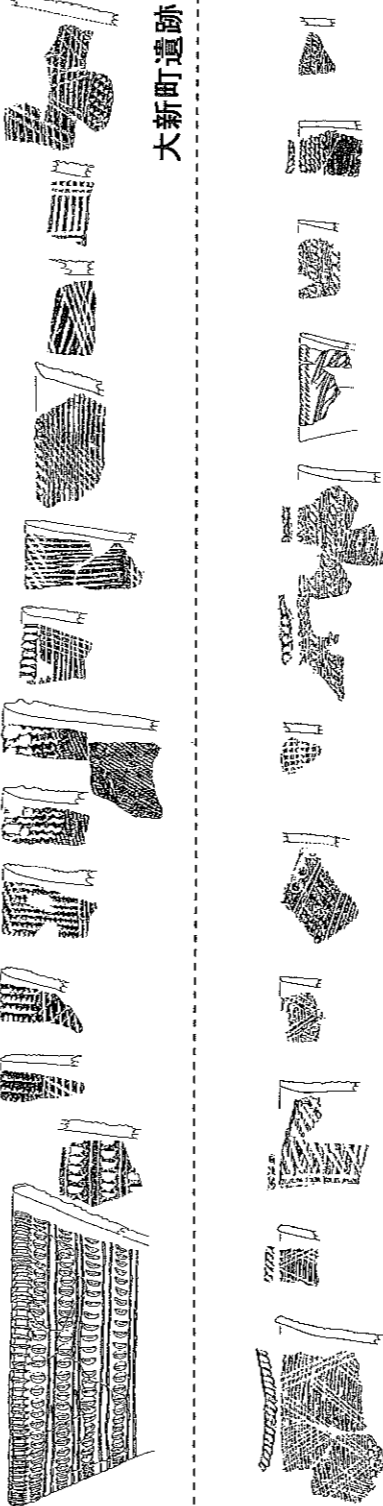




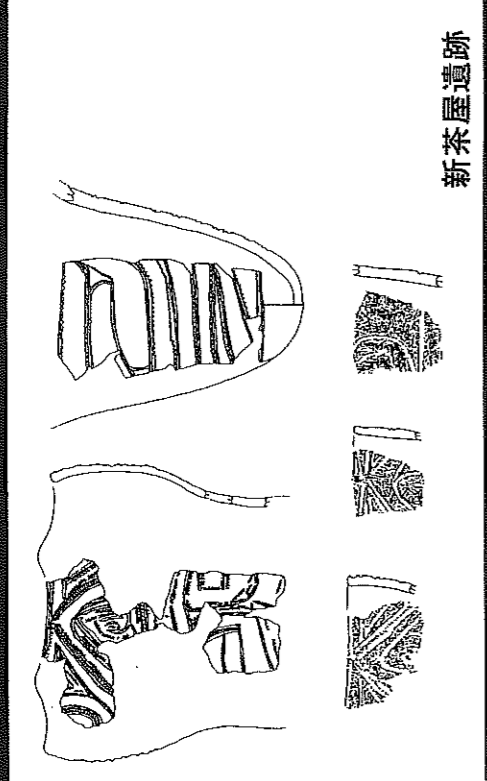
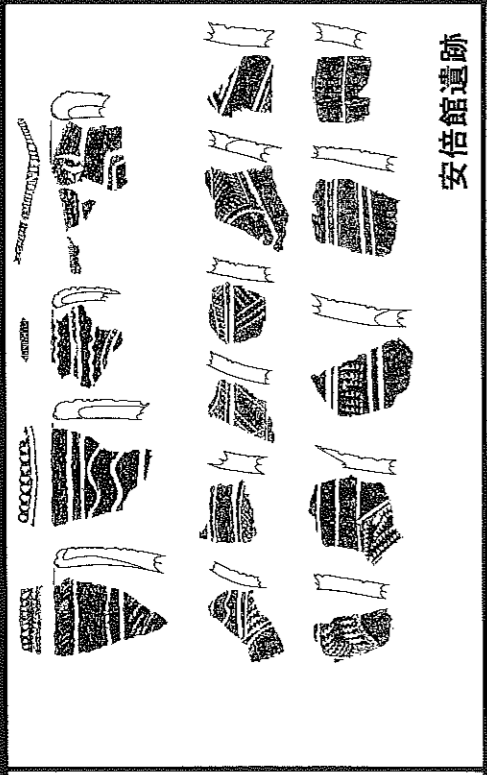
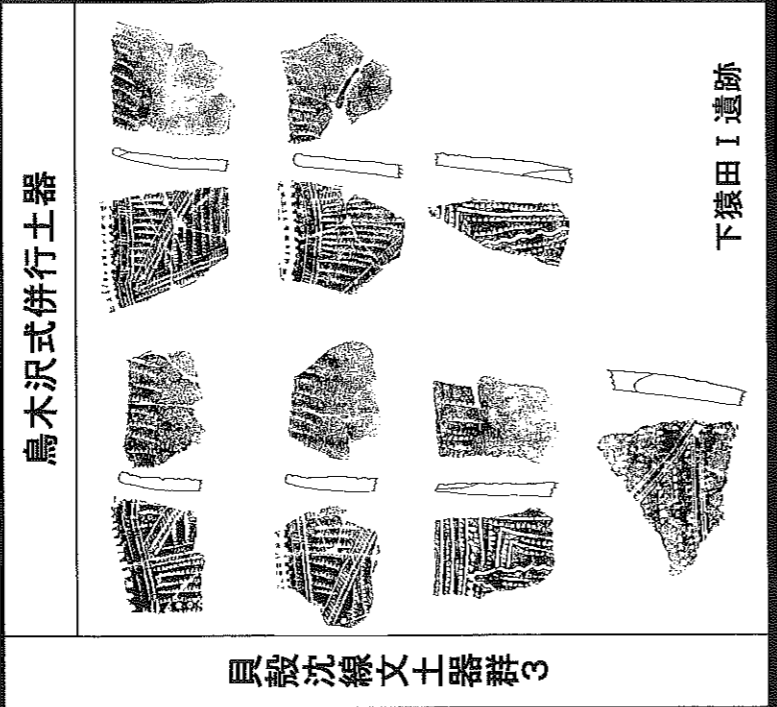
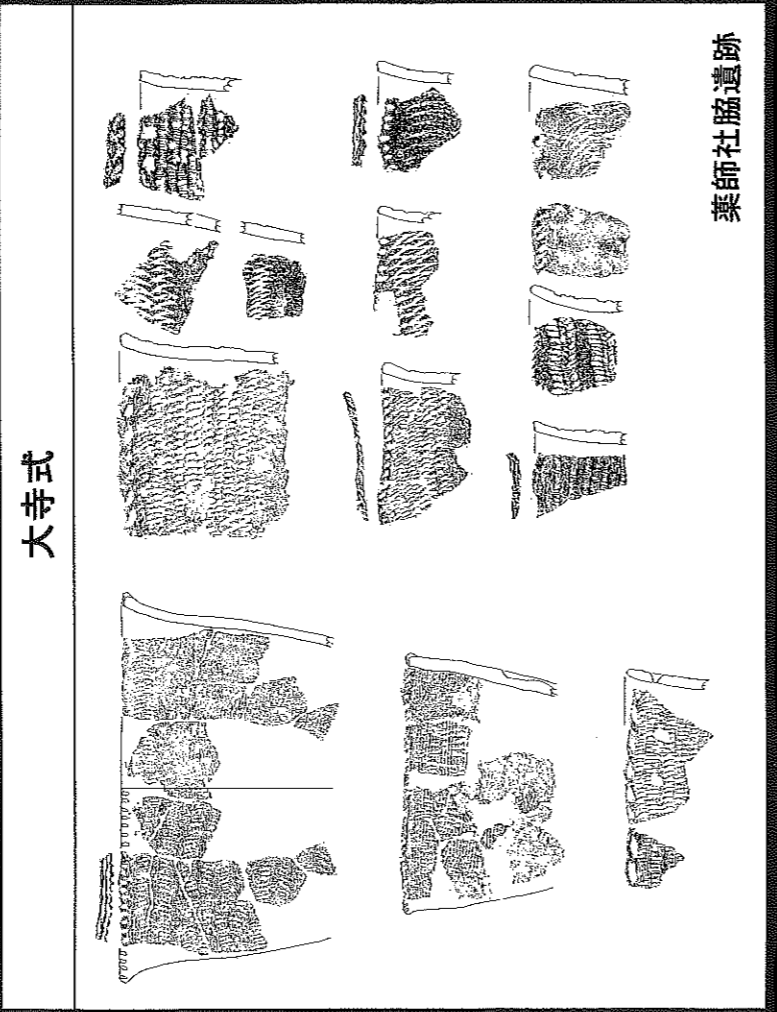
第15図 早期前葉から中葉にかけての文様帯変遷図

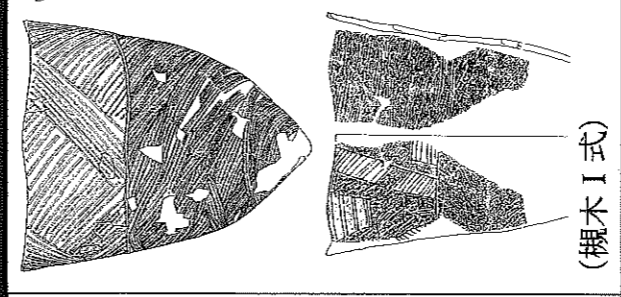
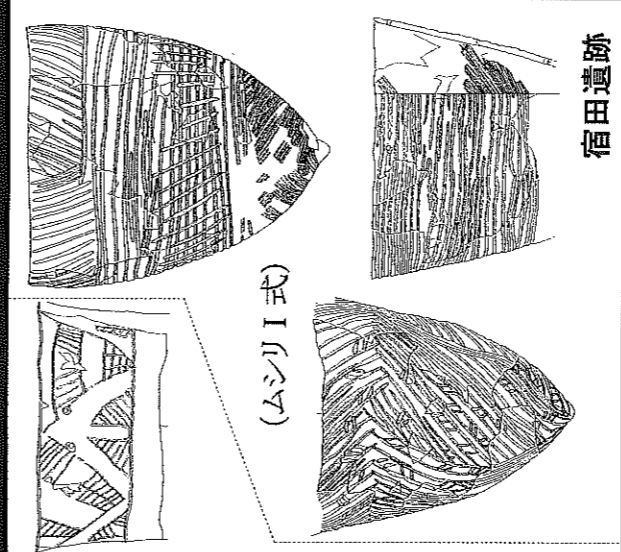
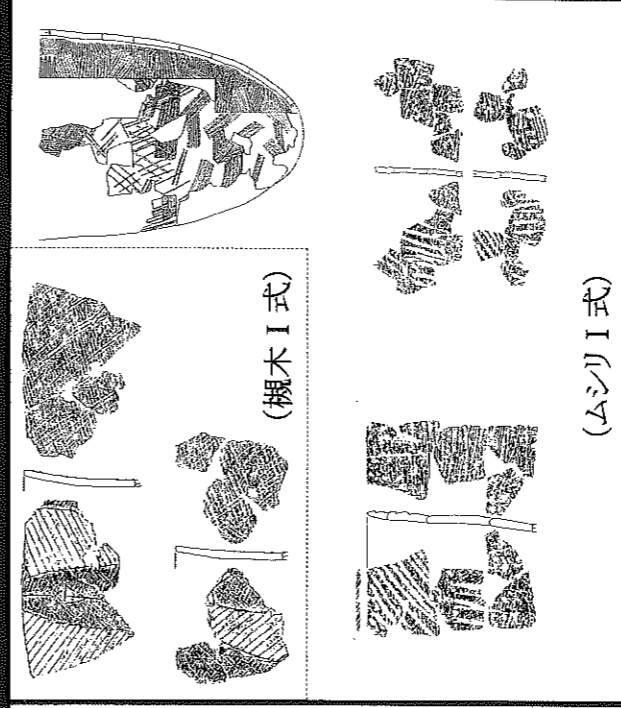
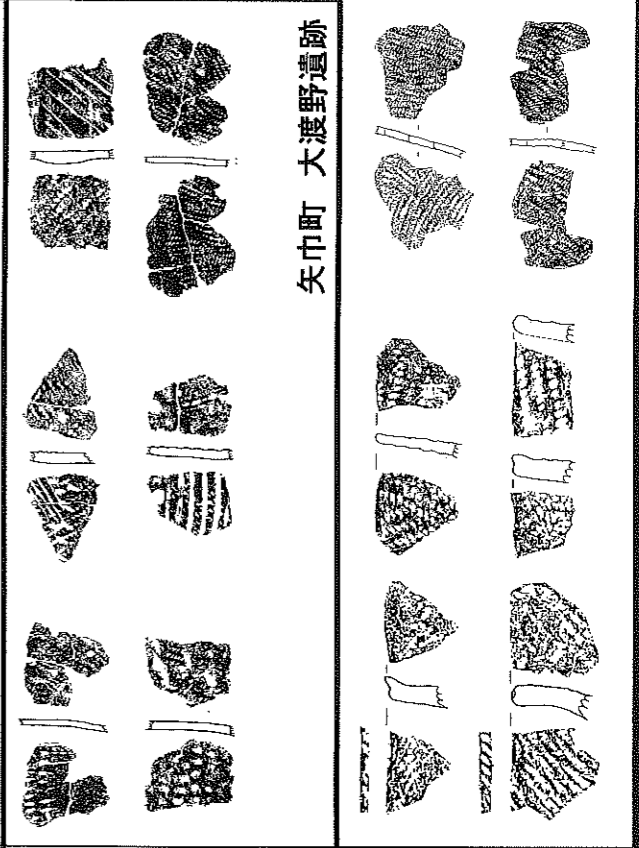
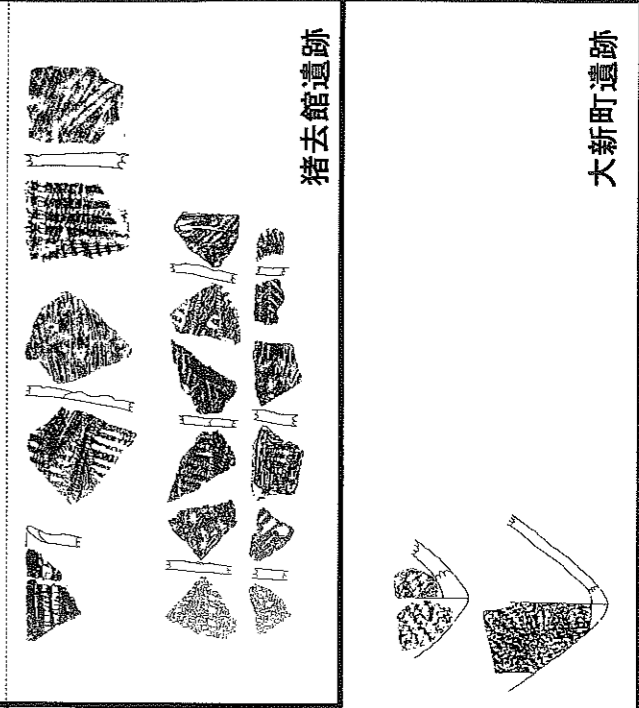
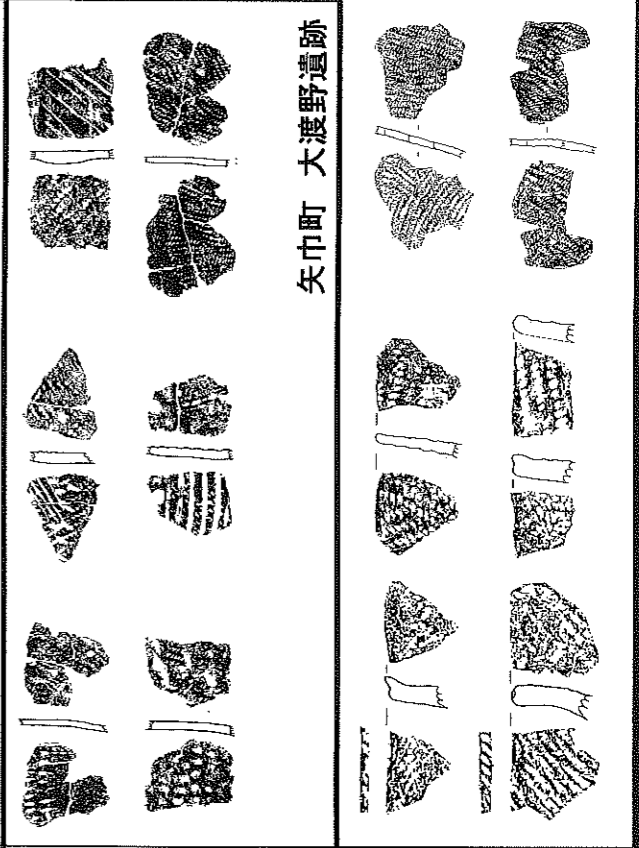
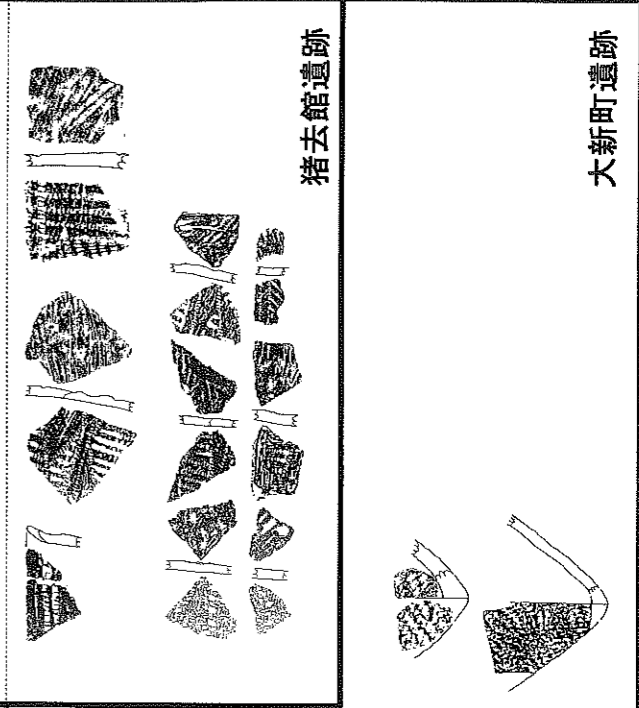
早期初頭	無文土器群	竜泉洞新洞式		山王山遺跡
早期前葉	押型文土器群1	日計式1?		大館町遺跡
		日計式2		庄ヶ畑A遺跡
		日計式3		大館町遺跡

早期前葉	沈線文土器群1	大新町a式		大新町遺跡
		大新町b式		大新町遺跡
		大館町式(大平式)		大館町遺跡

<p>蛇王洞Ⅱ式</p> <p>沈線文土器群2</p>		<p>西黒石野遺跡</p>
<p>薬師社脇Ⅱ群(大新町○式)</p> <p>貝殻沈線文土器群1</p>		<p>薬師社脇遺跡</p>
<p>早期中葉</p>		

<p>(仮)大新町○式</p> <p>貝殻沈線文土器群1</p>		<p>大新町遺跡</p>
<p>寺の沢式</p> <p>貝殻沈線文土器群2</p>		<p>新茶屋遺跡</p>
<p>明神裏Ⅲ式</p>		<p>新茶屋遺跡</p>
<p>早期中葉</p>		

<p>貝殻沈線文土器群2</p>	<p>物見台式</p> 	<p>新茶屋遺跡</p>	 <p>安倍館遺跡</p>
<p>早期中葉</p>		<p>鳥木沢式併行土器</p>  <p>下猿田 I 遺跡</p>	<p>大寺式</p>  <p>薬師社脇遺跡</p>

<p>早期後葉</p>	<p>条痕文土器群</p>	<p>ムシリ I 式・槻木 I 式</p>  <p>(槻木 I 式)</p>	 <p>(ムシリ I 式)</p> <p>宿田遺跡</p>	 <p>(ムシリ I 式)</p>
<p>早期末葉</p>		<p>縄文条痕土器群</p>	 <p>矢巾町 大渡野遺跡</p>	 <p>猪去館遺跡</p>
<p>早期末葉</p>		<p>赤御堂式併行</p>		 <p>大新町遺跡</p>

東北地方における早期前葉から中葉にかけての土器(1)

		盛岡周辺地域		東北地方南部 (福島県)	
押型文土器群		大新町遺跡(大新町a式)		福島県竹之内遺跡(竹之内式)	
(+)		大新町遺跡(大新町b式)		福島県前原A遺跡(大平式類似)	
(+)		大館町遺跡		福島県大平遺跡(大平式)	
青森県中野平遺跡(仮白浜式古段階)					
沈線文土器群1					
早期前葉					

東北地方における早期前葉から中葉にかけての土器(2)

		盛岡周辺地域		東北地方南部 (福島県)	
沈線文土器群2		西黒石野遺跡(蛇王洞Ⅱ式)		福島県馬場平B遺跡	
青森県根井沼(1)遺跡(白浜式新段階)		松屋敷遺跡		福島県竹之内遺跡(田戸下層式)	
沈線貝殻文土器群1		薬師社脇遺跡(大新町c式)		福島県前原A遺跡(田戸下層式)	
青森県根井沼遺跡(根井沼式)					
早期中葉					

東北地方における早期前葉から中葉にかけての土器(3)

<p>早期中葉</p> <p>沈線貝殻文土器群1、2</p>	<p>東北地方北部 (青森県)</p>  <p>青森県寺の沢遺跡(寺の沢式)</p>	<p>盛岡周辺地域</p>  <p>薬師社脇遺跡 (寺の沢式)</p> <p>新茶屋遺跡 (寺の沢・明神裏Ⅲ式)</p>	<p>東北地方南部 (福島県)</p>  <p>福島県タラ山遺跡 (田戸下層式)</p> <p>福島県竹之内遺跡 (田戸上層式)</p>
<p>※ 各地域の土器変遷図は該当地域の土器文様を概観し、盛岡編年に照合させたものである。その為、各地域の実情と合わないことが予想される。 福島県馬場平B遺跡では従来の大平式や田戸下層式に近似した土器が混在して出土しているだけでなく、両型式の特徴を併せ持つ土器も存在する。この土器群が過渡期の様相を呈しているものか、従来の型式観に訂正を加えるものなのか一概に言えないが、近年の出土例を参考に各地域の各土器型式を再吟味する必要がある。</p> <p>※ 白浜式を古段階・新段階としたのは、青森県中野平遺跡・西張(2)遺跡など爪形状刺突を幾何学状に施し、蛇王洞Ⅱ式に近似する土器や帯状格子目文を施す大平式にも近似する土器が伴う可能性がある遺跡の存在である。盛岡周辺では大新町c式にも白浜式に近似する土器が伴うことから、安易ではあるが白浜式の新旧2細別案を表面上で提示した。</p>			

盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化
【資料集】

発行日 2009年(平成21)11月30日

編集・発行

盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 盛岡市本宮字荒屋13番地1

電話 019-635-6600 FAX 019-635-6605

印刷・製本 (株) 興版社